
無の少女

耶麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無の少女

【Nコード】

N4381U

【作者名】

耶麻

【あらすじ】

桃井静香は感情を心の中に秘め、誰とも接しないで生きてきた。そんな彼女に『友達』は居ない。そんな彼女にある出会いがおとずれた。

はい！作者でーす！なんというか自分で読んでみてやっぱ下手だな・っつと落ち込んでしまいました。そんな作品なので気軽に読んでくださーい

01 無の少女と王子の出会い（前書き）

どもども。

前からこの話を書きたいと思っていたんです！

やっとかけて嬉しいんですがド素人なので面白いかどうか・・・

出来れば、ド素人と思ってみてください！！

01 無の少女と王子の出会い

悲しい、嬉しい、楽しい、腹立たしい。そんな感情を心の内に秘め、無で生きてきた少女。いつ、何があるかと感情を表に出さない。まるで人間ロボットのような少女。そんな彼女には友達というものがない。何があるかと感情を見せない彼女を嫌い、誰も近づいてこようとしなのだ。だから一生孤独、一人ぼっち。のはずだった。ある人に出会ってなければ。

教室の隅。一人で窓の外を眺める少女。少女は大人しいというよりも、感情を表に出さず何を考えているか分からない。どんな事があるかと決して他人には感情を見せない。無の少女。彼女を好くものはいなく、嫌いなものの方が多い。彼女は、思った事を口に出さない事から大人しい性格だと思われがちだが、実際にそうでない。どっちかという元気なタイプなのだ。

（担任遅い！あの先生は本当に2年目か。オドオドしすぎなんだよ。つゝか隅で悪口いっても聞こえてるっての）

そして、少々口が悪いこの少女の名は桃井静香^{ももいしずか}。あだ名は「無の女」。誰にも感情を見せない事からこういうあだ名が付いたそうだ。そんな彼女の家族は、皆家では普通にしているのだが外に出たり、家族以外の人と会う時は無表情なのだ。しかし、家族全員、美形のため無表情でも近所からの目は羨ましいとなる。それは大人だけなのだ。

一通り自己紹介、済んだよね？じゃ改めて言うわ！私は桃井静香。性格は家では元気な性格、外では無口&無表情で、嫌われる性格。ってこれ正性格なのかな？まあいいや。私はこの学校に入学して、

授業以外で人と会話をした事がない。っていうか私に寄って来る人なんていないんだけど。

今日はやけに教室が騒がしい。その理由は転校生が来るから。しかもイケメンらしい。私はそういうの興味ないけど。私が気になっているのは時期。転校してくる時期が何故こんな中途半端かが気になっている。だって今、6月だよ？ しかも私達は1年生。ね？ 不思議でしょ？

そんな事を考えている内に担任が入って来た。皆、担任の後ろに注目！！するとそこに入ってきたのは・・・

「どうも初めまして。天王寺海てんのうじかいです。これからよろしくお願いします」

そこでわあー！！と声上がる。（とくに私以外の女子）天王寺は背は170くらいあって顔は超がつくほどのイケメン。それに私以外の女子は大興奮。前に立っている担任はオドオドしだした。

（あゝ！！そのオドオドがイライラする！）

そう思った私は、何のためらいもなく自分の机に勢いよく手を叩き付けた。すると、大きい音が鳴って教室にいる全員が私の方を目を大きくして見た。勿論、担任も天王寺も。

「先生。早く授業始めてください」

私がそういうと担任は、ハツとして急いで天王寺を開いている席に座らせ授業を始めた。それから、休み時間が来ると天王寺の周り人は人でいっぱいになった。転校初日にして天王寺はクラスの中心人物になった。

~~~~放課後~~~~

私は唯一、自分の本音を口に出しえいえる場所が学校にある。それは誰も来ない屋上。屋上は私だけの心地よい場所、のはずだった。屋上に続く階段を一段一段上ってゆく。屋上に入る扉の前へ来た時、扉の向こうから声が聞こえた。・・・声？誰だ？屋上に来るなんて。今まで一度もそういう事は無かったのに。思わず勢いよく扉を開けてしまった。屋上のご真ん中にいた人が振り返る。相手は目を大きく開いて私を見た。それは私も同じだったと思う。何故なら相手は天王寺だったからだ。お互い驚いて止まっていると天王寺が口を開いた。

「あの・・・えっと・・・桃井さん？」

私は本当の自分がばれてはいけないと思い、体を180度回転させ階段を急いで駆け下りた。ただでさえ、無表情が崩れたのにそんな質問に答えようとは思わない。あれだけ距離が離れていたら追いつけるはずも無い。そう思い速度を緩めた瞬間、私の腕が後ろに引張られた。

「何で、逃げる、の？な、まえ、聞いただけ、じゃん」

天王寺は、全速力で駆け下りて来たらしく、息が上がってた。そして途切れ途切れに私に問いかけた。けど、私は答える気はまったく無いのでずっと黙っているとだんだん息が落ち着いてきた天王寺は私の手を引っ張ってまた屋上へ戻った。

「え！ちよつと！」

私は手を引っ張られているから何度も階段でこけそうになった。それでも、天王寺はこけそうになる私のバランスを取りながら屋上へと連れて行った。屋上に入ると天王寺は扉の鍵を閉め、その扉の前に立った。

「桃井さんだよね？どうして逃げたの？」

「あなたには関係の無い事。何しようが私の自由」

なるべく丁寧な言葉で、声は少し低くして私は言った。勿論、無表情で。

「あなたはここで何してたの？ここは立ち入り禁止。お昼、クラスの女子を連れて校内探検したはずだから知っているはず。理事長に許可を得ないと入れないの。ま、そうどうしようと理事長なんかと話せないと思うけど」

（あゝ久しぶりに家族以外の人にこんな長く話したわ。ま、今日はしょうがないか。）

私のお母さんとこの学校の理事長は昔からの友人だから私は、理事長にもお世話になっている。そしてこの、屋上を使う許可ももらっている。普通の生徒ならば、理事長に会う事、理事長室に入ることすら出来ない。

「じゃあ理事長に許可もらえばいいの？」

天王寺はニッコリ笑って携帯を取り出した。そしてしばらくして私に近づき1通のメールを見せた。そこには・・・

『天王寺海君。君の屋上使用を許可する 理事長』

「これでいい？」

天王寺はにっこりと笑った。私は驚きそのメールをしばらく見ていた。そして自分の携帯を取り出し理事長に電話をした。

『もしもし』

「もしもしじゃない!! 久美子さん! なんで天王寺なんかの使用許可出したんですか!?!」

理事長の名前は堀場久美子<sup>ほりばくみこ</sup>。私が理事長の事を久美子さんと呼んでいるのは久美子さんがそう呼んでと言って来たから。久美子さんは理事長と呼ばれるのは嫌いなんだそう。後、いくら私が口が悪くても一応、偉い人なんで敬語は使ってます。たまに崩れるけど。

『ええ〜だって天王寺君カッコいいでしょ? あんなイケメンに頼み事されたらなんだって即OK出しちゃうわよ!!!』

久美子さんって・・・イケメン好きでしたね。それでも!!

「たとえ久美子さんがイケメン好きで即OKだしたとしても屋上だけはやめてください! 屋上は私の唯一、本音を言える場所ですよ? 私はここに家にしか居場所は無いんですから!!」

『うん。それは分かってるけど何でそんなに人を避けるの? 天王寺君は良い子だよ? 一回話してみて。ね? どうせ、下校時間過ぎてもいいし。じゃあゆっくり話してみてね。バイバ〜イ』

久美子さんはそういうなり電話をぷつりと切ってしまった。私はその事に小さく舌打ちをして振り返った。当然、相手は結構遠くにいるはずなのに・・・なんと天王寺は何故か私の目の前にいた。私が何かを言う前に天王寺が先に口を開いた。

「今のが本性? なわけないか。理事長使用だね。本性は?」

さっきの話聞いてたのか。とにかくコイツから逃げないとコイツだけは関わりたくない!! 絶対に!!

そう思っている私は、言葉を選ばず、さっきみたいな丁寧な口調で



言った。

「本性？何言ってるんですか？訳がわかりません。それより良いんですか？校門で女子があなたが出てくるのを待っています。猫かぶり王子さん」

私が言うと、天王寺は驚いた表情を見せた。あ、ちなみに天王寺のあだ名は何故か『王子』になった。そして何故猫かぶりかと言うと、私が見抜いたから。自己紹介では言っていなかったけど私の特技は『人の裏を見抜く事』。いつからか分からないけど気づいた時にはこの特技が身についていた。この事を言うと勿論、気味悪がられたしその事で嫌味も言われた。だからこの事は今まで誰にも言わなかったし言おうともしなかった。でもコイツだけには関わりたくなかった。だからこの事を話した。なのにこいつが言った言葉は・・・

## 01 無の少女と王子の出会い（後書き）

どうでしたか？あまり自信が無いのですが・・・

出来れば、ダメだし、感想書いてください！

## 02 (前書き)

今回は静香の過去が入ります

（あゝ頭痛い……。あいつが昨日あんなこと言うからだ……）

今は朝。昨日、天王寺が転校してきて屋上に行って、特技の事はなしたんだっけ？もの凄い省いたけど気にしない、気にしない。で、あの後あいつがなんていったかと言うと

「スゲー！何それ特技！？面白い特技持ってんな〜！」

だよ？私にしては予定外。この事を伝えると嫌われるはずなんだけど、逆に気に入られてしまった……。私はその瞬間、逃げた。何も考えず、ただただ家にむかって走った。今思えば、喋り方がそこからへんの男子と同じになってた。あれが天王寺の本性か……。

そんな事を考えている内にクラス全員が揃い、授業が始まっていた。ちなみに、私は無表情の時はする事がなかったから勉強をしてたらなんと学年1位になっていた。私って頭良い！っと自分で褒めてるよ（笑）

授業が終わり、いつもどうりボ〜っとしていると誰かに話しかけられた。……。？誰？私に話しかけるなんて頭狂った？

そう思いながら声の持ち主の方に顔を向ける。その瞬間私はおもいつきり顔をしかめた。分かった？誰が声をかけてきたか。

「桃井さん。ちょっといいですか？」

笑いながら言うそいつは天王寺だった。うわぁ……。女子の目が怖いよ！あれは皆天王寺狙いだ……。目が怖い、目が！目も怖いけど、天王寺が満面の笑みで笑ってるのも怖い……。仕方なく天王

寺についていく事にした。

「なんですか？出来れば教室では声をかけないでほしいのですが」  
「嫌です。そんな事より何故逃げたんですか？俺、別に変な事言っ  
てなかったでしょう？」

前半満面の笑みで、後半ちょっと怒り気味に。確かに悪かった、悪  
かったって。だからその怖いオーラを放つのやめて！！なんて心で  
叫びながらなんていおうか考える。まあ直ぐに答えは出たけど。

「ただなんとなくです。本当に教室では声をかけないでください。  
殺されかけるので。」

私はお辞儀をして「誰に殺されかけるの？」って顔をした天王寺を  
置いて教室に戻った。女子の視線が怖いよ・・・ああ、何か絶対言  
われるだろう。え？何でそんな事分かったかって？そりゃ女子の  
視線もあるけど、このクラスの女子をまとめているリーダーが昼休  
み体育館裏に来るようになって紙に書いて渡してきたもん。面倒な事  
になるだろうな・・・。

くく昼休みくく

「何であんたみたいなのが王子様に呼び出されるの！？」

「あんた見たいなのが相手にされてる訳ないじゃん！」

「チョーしにのんなよ！このブス！」

はい来たー！！やっぱ言われた！てか、最後の言葉なんだけど、あ  
んな達より絶対私の方が可愛いとおもうよ？あんた達も化粧とか色  
々して可愛く見せてんだろうけど私何もしないよ？そして何で様  
が付いてんだろう？あ、流れる的に？王子、王子、王子様・・・あの  
顔だったら王子様の方が似合うか。

ぐだぐだ言ったけど（心の中で）結構やばいよね？今の状況。ここは体育館裏で相手は数名。そしてその手にはバケツ。しかも中身がたっぷりと入った……。今時こんなベタなイジメする人いるんだ！！あ、これってイジメって言うか警告（？）みたいなもんか。そんな事を思っているうちに頭から冷たいものが流れてきた。その正体は水。

「あはは！！いい気味！お前にはその姿が一番似合うよ！」

リーダーが言う。んゝさすがにちよつとムカついて来たかな？そろそろ反撃でもしようかな？

「そう？じゃあ私もあなたをお似合いな格好にしてあげる」

そこで少し笑う。近くにあったホースを手に取り、リーダーのお腹に軽く一発パンチを食らわす。リーダーはうっ！！とうめき声を上げ地面に倒れる。そのリーダーに手下が「大丈夫！？」と駆け寄る。そして私はその駆け寄った人ごと上から水をまいた。

「な！？や、やめて！やめてよ！やめてよお……」

だんだんと声が小さくなっていく。やりすぎたら後々面倒だしここで終わりにしようかな。蛇口をひねり水を止める。あゝあ。せっかくのお化粧が落ちてお化けみたい。そう思ったとたんに笑がこみ上げてくる。

「な、何笑ってんのよ！！」

リーダーは私が笑っている事に腹を立てていて、後の人たちは私の

方を珍しいのを見るように見ている。それもそうか。私が笑つて  
るもんね。別のことを考えるとこみ上げてくる何かが少し抑えられ  
た。私を狂わす何かを。

でもそれは少しだけ。早くここから去らないと私自身、止められな  
くなる。

「もういいや。それよりあんた。さっさと保健室言った方がいいと  
思うけど？じゃあね」

そっくり残して屋上に向かう。どうせならこの後の授業サボってし  
まおう。あ、でも次数学だ。いかなきゃな。あの先生に気に入られ  
る途中だし。今抜けたら、ややこしくなるしね。

私はぬれた制服を絞りながら下駄箱においておいたジャージに着替  
える。なんであるかって？そりゃこういう事になる予想がついてい  
たからあらかじめもってきておいたんだよ。さすが私！なんて自分  
で褒めながらトイレにむかう。しばらくしてから出ると教室にむか  
った。私が入った時皆ビックリしてたけど（ジャージだから）その  
事を気にせず自分の席に座った。

数学の授業中、私は久美子さんに呼ばれた。もうあの人の耳に入っ  
たのか。さすが理事長。自然と笑がこみ上げてくる。笑いをこら  
えながら理事長室に向かう。理事長室に着き扉を軽く2回叩く。す  
ると中から「どうぞ」っと声が聞こえた。

「失礼します。相変わらず耳に入るのが早いですね。理事長」

何故ここで私が理事長と呼んだか、理由は一つしかない。それはあ  
のリーダーと手下がいたから。多分、さっきの事をチクリに来たの  
か、誰かに見つかつてつれてこられたのだろう。チクリに来ると言

う度胸は彼女達にはないから多分つれてこられたのだろう。惨めな姿で。

「この子達が唯一口に出したのは『桃井さん』と言う言葉だけ。静香、ゴメンだけど何があったか話して」

「そうだな〜どれから話そうかな？まずね、こいつらに呼び出されて水ぶっ掛けられたの。それで腹が立ってきたから少々お返しをしたただけだよ？ざっくり言うかね。久美子さんはさ、こいつらの味方するの？この惨めな奴らに」

そういった時少し顔が緩んだ。久美子さんは私の事をじっと見ている。まあ久しぶりだからね。久美子さんの前で笑うの。リーダー達は私が普通に喋ってるのでビックリしている。

「静香あのね。聞いてほしい事があるの。この子達は悪気で言ったんじゃないんだよ？ただ天王寺君を取られたくなくて・・・」

「うるさい黙れ」

これは私。無表情で無口な偽りの私じゃなくて本当の私。元々口が悪かった私はその事を隠すようにして生きてきた。ただ、腹が立ったり、自分で感情を抑えられなくなった時には本当の姿が出てしまう。けどそれは小学校まで。今ではそれなりに抑えられるようになった。つまり、好きな時に出せたり引っ込ませたり出来るという事。

「てか知ってるじゃん。やっぱ話したんだ〜！理事長には逆らえないもんねー。で、久美子さん。私の処分は？」

「・・・今回は処分はないよ。けど、次ぎやったら1週間謹慎は確定」

「え〜ないのか〜。次ぎやるかどうかはこの人達しだいだよ。じゃあ私はこれで」



そういつて理事長室を出た。私がこんな本性を隠しているのには訳がある。私だって小さい頃は口が他の子よりも少し悪い子だった。でも小学校をだんだんとあがっていく程に口が悪くなっていた。それでも無口、無表情で過ごしてきた私がある日いじめを受けた。その子はクラスの中心的存在で、その子の言う事には絶対服従だった。だからイジメを受けた次の日にはクラス中が私を完全に無視した。

そのイジメは小学校卒業まで続いた。卒業式の日、最後のイジメと言って私にバケツに入った水を永遠とかぶせ続けた。私はかぶせられる水がなくなり汲んでいる隙を突いて私を抑えていた子のお腹に蹴りを食らわせた。

## 02 (後書き)

静香の過去の話は次で終わると思います!!

その時、体なのかで何かが切れるような音がした。それから記憶があいまい。何故か悲鳴を上げているイジメっ子。その悲鳴が私に対してあげられている事に気づいた時には先生がイジメっ子を抱き上げていた。そこから記憶はないけど久美子さんから全部教えてもらった。相手がどうなって自分が何をしたかも。

それから私は久美子さんが進める中学に入った。そこでは誰にも関わらず、親しくならず、ずっと一人でいた。記憶に残る先生の目、私を化け物みたいにみた目。それは周りも一緒だった。それから私は特に何もする事なく、友人や恋人を作らずに今をむかえている。

どんなに悪口を言われようとこの気持ちは爆発しなかった。爆発したのは多分、トラウマとか言うものがあるんだろう。私が思ってた以上に心に傷は残ってたんだ。その傷に住み着く悪魔も。その悪魔は私の心の弱さのせいで生まれた。悪魔を繋ぎとめていた鎖が心の弱さのせいでちぎれた。

「桃井！聞いてる？」

あ、今の天王寺だよ。何故か素に戻ってるんだよこの屋上では。まあ硬い天王寺より軽い天王寺の方が今はいいけど。

「聞いてません。てか、何でまた屋上にいるんです・・・か門の前であなを待ってる人達がいるんですよ？」

「まーいいじゃん。待ってくれて言った訳じゃないし。それにしても本当に出さないよねー本性。そろそろ出してくれてもいいじゃんかー！！」

「何故ですか。あなたに本性を見せるなんて訳が分かりません。」

って言ってもこの喋り方はさすがにしんどいんだよねえ・・・しかも何でこんなに普通に喋ってるんだ私・・・。

「なあ桃井」

「あ？」

「・・・」

「・・・」

（し、しまったー！！いきなりだったから思わず素のままで返事しちゃったよー！！ど、どうしよう！）っと内心焦ってはいるが表では無表情。のはずだただけど・・・

「あはは！！そ、そんなに焦んでもいいじゃん！あ、それ本性なんだ」

「ち、違う！！」

「桃井って嘘つくの下手！！これからここではお互い本性だそう！な！静香！」

し、しまったー！てか、何であいつは焦ってるって分かったんだー！？完璧に無表情だったはず・・・なんで？

「てか、さりげなく下の名前を呼び捨てすんな！・・・あ！」

「気づいた？本性出ちゃってるよー呼び捨ては・・・まあいいじゃん。その代わり俺の事海って呼んでいいからさ！」

「いやそっちじゃなくて！門前であんた待ってる子達が不良に絡まれた！ヤバイ！」

私は急いで門に向かった。正直あまりこういう面倒な事とか本性が

ばれる様な事はしたくないのだけれど仕方ない。これが家の決まりだから。桃井家の掟その1・困っている人がいたら何が何でも助けるべし！この掟を守らないとお仕置きがあるんだよねえ……。だから何が何でも助けないといけない。

私は走って行き蹴りを食らわせた。まあ正直言うところの不良は弱い。一人に蹴りを食らわせたらあっさりのびた。わく……。弱っ！！さすがにこれは弱すぎじゃ

「コウキ！？何しやがるこの女！！」

ほおくのびたこいつの名前はコウキか。ま、憶えるほどでもないけど。コウキとさけんだ男は右手を握り私に襲い掛かってきた。私はそれを避けながら少しかがみお腹にパーンチ！男は体をくの字に曲げながらうめき声とともに地面に倒れた。

「ただの女じゃないよ。格闘技習ってたからね。この二人見て分からないかな？だいぶ強いよ？」

あゝ本性が出かけてか出してんだけど。これ以上するのも面倒だしさっさと帰ってもらおうかな。

「えっと、今から5秒以内に私の前から消えないとあんた達地獄送りね。1く2く」

っと数え始めるとその場にいた奴らは倒れた二人をかついで逃げていった。2秒……。逃げ足だけは速いのか。私はそう思いながら後ろにいる忘れかけてた存在に振り向いた。そこで振り向いた事を後悔した。

「えっと……。桃井さんだよね？あの無の女の」

こいつは確かクラスで2番目に成績が悪い久遠麻衣<sup>くどうまい</sup>。よりによってクラスメイトとは・・・ついてない。私はそいつを無視して帰ろうとした。すると校舎の方から大声で誰かが叫んできた。

「しゝずゝかゝゝ!!!! 待てゝゝ!!!!」

ここで1番登場してほしくない天王寺が登場。てか静香って呼ぶなよ! 何さりげなく呼んでんだ!

「天王寺! 黙れ!」

私は走って私の側に来た天王寺に小声で囁いた。なのに天王寺はそんな事お構い無しにどんどん喋る。

「急に走っていくなよ! ビックリすんじゃない! てか天王寺じゃなくて海だって! か・い! さ、呼んでみて!」

「ああゝうつとおしい! 黙れ! その口は黙れないのか! ?」

「や、黙れるけど・・・」

「じゃあちよつと黙って」

「はい・・・」

今1つ分かった事はこいつは素の時は子供みたいになる事。だからきつく言うのと直ぐにいう事聞いてくれる。多分猫かぶっている時はこういう事はないんだろうな・・・

「桃井さんあの・・・」

「うん。言いたい事は分かるけどこの事は誰にも言わないで。何なら天王寺の事1日好きに使っていいから!」

「やつあのそこまで頼まれなくても誰にも言わないよ。そ、その1

日好きに使えるのって・・・本当？」

「いいよね？天王寺？」

天王寺はえっ！っと言う顔を見せながらも私が睨むと急いでうなづいた。

「本当にいいの？」

そう言って久遠さんはまた天王寺の顔と私の顔を交互に見た。これで3回目くらい見てるだろう。天王寺は首を縦にブンブンと振っている。私はただ元の無表情に戻ってそんな二人を見ているだけ。そんな中で始めに口を開いたのは久遠さんだった。

「あ、あの・・・桃井さん。何か怒ってる？」

「え？怒ってなんかないよ？」

「そ、そうなんだ」

どうして怒ってるって思ったか分からない。久遠さんは怒ってないと分かって安心したのか私に向けて笑った。久遠さんは可愛い。女の私が言うのも変だけど嫌われたりはしない性格と顔だ。そういうところがお姉ちゃんに似ていて思わず家族にしか見せた事のない笑顔で笑い返してしまった。

「桃井さん・・・」

私はしまったと思って顔を手で隠し笑顔を引っ込めた。その様子を見て不思議に思ったのか久遠さんは首を少し曲げ、私にどうしたの？と聞いてきた。

「いや・・・私の笑顔って何かダメらしいから・・・」

「え！？そんな事ないよ！誰がそんなこと言ったの？」

「え？あ、お父さんが言ってたけど」



ずっと前、子供の頃にお父さんに笑いかけたら「静香・・・もうその顔家以外でしたらだめだぞ！」って言われてしまった。その事もあってこれまで笑わなかった。

「そんな事ないのに！ね！天王寺君！」

「うんうん！笑ってた方がいい！」

「そう？でもあんまり人前では笑えないかも。それより久遠さんはそうするの？天王寺の事」

私がそう聞くと久遠さんはどうしようかな～っとしばらく悩んでそれからそうだ！！～と言って私達を交互に見ながら言った。

「遊園地に行くって言うのはどう？4人で」

「遊園地に行くのはいいけど4人ってこの場には俺達3人しかないないよ？」

などと二人で話し合ってる。っというか何故私が行く事になってるんだろう？しかも決定してるし・・・私に拒否権はないのか？天王寺はいつの間にか（というか最初から）仮面がはがれてますよ。久遠さんもその所には触れないのかな・・・？って私も仮面はがれてたっけ。

「あと一人は私が誘っておくよ。とりあえず明日の朝9時にここに集合ね！じゃあバイバイ」

っとさっさと一人で帰ってしまった。久遠さんは思ったとおり明るくて元気な人だな～

～～次の日～～

「眠い・・・早い・・・」

これは私。実は私朝に弱い。だから学校とかでは朝ほとんど寝ているような状態だ。授業はちゃんと聞いているけどね！とそんな事を思いつながら大きなあくびをしていると後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。勿論それは久遠さんなんだけど。

「桃井さんおはよう！」

久遠さんはいつもどおり元気で朝なんて関係ないらしく超ニコニコ笑顔だ。私はそんな久遠さんに挨拶を返してから後ろでもの凄い大きなあくびをしている人物に目が留まった。それは一瞬、誰だ？と思うくらい制服と感じが違う天王寺だった。

「王子、私服となると全然感じ違うよね」

「うん。ぜんぜん違う。ってもう一人は？」

「あゝ寝坊したんだって。さっき電話あった」

私は後もう一人が誰かは知らない。教えられてもないし聞いてもない。ただ、こんなふうに久遠さんや天王寺と素で話せるようにその人にも素で話せるのだろうか？私は今まで小さい頃の事もあって関わりを持たなかったって前話したよね？だから今素で話せている二人は私にとっては特別といってもいい存在。それがもっと増えるのだろうか？その人は私を見て引いたり怖がったりしないのだろうか？そんな不安が渦巻いている。私は前よりか前向きになった。だって今、会ってみなきゃ分からないと思っっているから。そんな事を思えたのは多分、この二人のおかげなんだろう。

そんな事を思いながら来るはずのもう一人の人物を待っていた。しばらく待っていると向こう方から全力とも思える速さでこっちにむ

かってくる男子が目に入った。多分あれなんだろうけど・・・あの人足、早!

「わりいーわりいー。ってあれ?」

「何よ。智宏」

「いや?これは珍しい組み合わせだと思ってよ。学年の王子に学年の姫、学年一無感情の女」

「学年一爽やかで陸上部のエースだったっけ?」

その噂の名前を聞いてようやく誰かわかった。ちなみにこの噂の名前は本当。天王寺のは転校してきて2日で広まったから凄い。学年一爽やかで陸上部のエースの名前は『北原智宏』きたはらともひろだからか、足が速いのは。

「智宏あんた桃井さんの名前知ってるの?」

「知らん」

だろうね。私の名前を知ってる人なんか1人か2人くらいだ。いや、そんなに知ってるかな?そう思いながら一応、自己紹介をしておいた。

「桃井静香です。北原智宏君だよね」

「お!正解。静香ちゃんね」

「・・・静香か桃井にしてください」

静香ちゃんは・・・言われ慣れてないから少々恥ずかしい。名前を呼び捨てにされた方がまだましだ。

「じゃあ静香でいいか。よし!遊園地!」

「子供か。じゃ桃井さんも王子も行こう!」

つとノリノリな二人に連れてかれた遊園地はもの凄くでかかった。  
こんなでかい遊園地に来るのは何年ぶりだろうか？ いや、よく考えれば来た事ないかもしれない。

「でか・・・最初ってどこ行くの？」

「ん？ まず始めはあれだろ」

「「ジェットコースター」」

北原はにやりと笑い久遠さんはむちゃくちゃくらい顔になった。あゝ久遠さんはこういう系が苦手なんだ。新しい発見だ。そして私達は北原に連れられジェットコースターに乗った。その結果は・・・

「なにあれ！？ 超楽しい！」

「だろ！ 静香は分かってくれたよ！ その二人吐くならトイレへ」

北原がそういうと二人はもうダッシュでトイレへと向かった。その様子がおかしくて私と北原は爆笑していた。

「はぁゝお腹痛い！ 笑える！」

「マジ爆笑だわ！・・・静香ってさ、何で無表情でいんの？」

突然の質問にしばらく動けなかった。でも北原の目が真剣だったの  
で何故無表情なのか『悪魔』について話した。それを聞いた北原は  
最初のため息をついた。あまりに意外な行動だったのでビックリし  
た。もっと可哀想とかそういう事を言われるかと思ってたのに。

「静香さ、自分は可哀想な子ってどこかで思ってたんだよ。だからそ  
の悪魔ってもの生まれたんだろ？ 確かにそれは心の弱さで生まれた  
かもしれないけどそれじゃあ強くなればいいじゃん、支えてもら

えばいいじゃん。友達にさ。」

友達・・・何故か今まで長い事悩んできた事なのにその言葉を聞いただけで一瞬にしてその悩みはなくなった。そうかもしれない。私はどこかで自分は可哀想な子だと思い込んでいたんだ。北原の真剣な顔に私は、今まで家族にしか見せた事のないような笑顔を向けた。

「静香さ・・・笑ってみるといいよ。何があっても笑ったらいいよ。静香の笑顔なら誤解も解けるだろうし。」

「うん。ありがとう北原」

それからしばらくして二人が帰ってきた。最初の私と表情が違うからか久遠さんのテンションは最高にまで達したらしい（北原が言っていた）それから3つほど回ってそれから私の一番苦手なところに来た。そのアトラクションの名は・・・

「お化け屋敷・・・」

私は怖い系が大の苦手。お化け屋敷なんて絶対入りたくない場所だ。私がお化け屋敷の前に行かないでいると3人はにやりと笑ってからかってきた。

「静香ってお化け嫌いなんだ」

「桃井さん可愛いー！！」

「静香可愛いー！」

多分、私の顔は真っ赤だと思う。私は「苦手でもないし可愛くもないー！！」っと強気になって進んでいった。数分後・・・

「うう・・・」

「大丈夫？あれは凄い叫び声だったね」

「お化けの人も笑ってたぞ」

「あゝ笑える！」

それはもう怖く酷い叫びだった。だって怖かったし！！それで叫んで天王寺は大爆笑。二人は心配してくれてるのに！！その後は私の苦手なところはなく楽しかった。もう直ぐ夕方。帰るかという事になり電車に乗っていた。

「はぁ・・・疲れた」

「そうか？それ静香だけだろ？」

「いや、俺らもだいぶ疲れたぞ。どんなだけ元気なんだよ」

「智宏は元気がとりえだし・・・あ、桃井さんメアド交換しようよ！！」

突然いった久遠さんはすぐさま携帯を取り出し準備した。私もそれを見て自分の携帯を取り出した。久遠さんとの交換が終わりしまおうとすると北原にいきなり携帯をとられ勝手に交換した後、天王寺にパスし天王寺も勝手に交換し始め、私が奪い取る頃には交換は終わっていた。

「私の携帯なのに・・・！！」

「じゃまた送るから。静香もなんかある時送って来いよ」

っていつてるけどね北原！！これは私の携帯。お前のじゃねえー！ー！っと心の中では不安が爆発していた。そんな事は知らずに北原は喋り続けていた。

## 04 (後書き)

何か、静香と天王寺のキャラが・・・崩れています!!!

難しい・・・

## 05 いきなり生徒会!?

「お、おはよう」

そう言って少し微笑む。その途端、私が話しかけた生徒はピシ!つと石のようになった。ありゃ? そんなに表情へんだったか? 私悩んでいると久遠さんが話しかけて来た。

「桃井さ〜ん! どうしたの?」

「昨日、北原に笑って見たら? って言われたからちよつと微笑んだら固まって・・・動かない」

「ああ〜それね、ほつといていいよ。今から教室行くけど笑顔で挨拶だよ!」

「うん」

久遠さんと一緒に教室に行くと皆は最初驚いてて、私が笑顔で挨拶するとまたピシ!つと固まった。久遠さんは大丈夫って言うてくれたけど本当に大丈夫なのか・・・? 不安に思いながらも自分の席に座ろうとした。座ろうとしたんだけど座れなかった。知らない人が座ってたから。

「あの・・・そこどいてくれませんか?」

「え? ああ、悪い。って噂の人じゃん」

「はあ・・・あの、早くどいてください」

「あ、うん。ありがとう」

どうやらその人は私の前の席の人と話していたらしい。邪魔しちゃったかな・・・



「あの、用意終わったのでよければ使ってください」

「・・・ホントに桃井静香？」

「はい。桃井静香ですけど」

何を言い出すんだこの人は。ってかよく私の名前知ってたな・・・この人、凄い！っていうかこの人、どっかで見た事あるような・・・誰かそっくりさんを見た気が。そっくりさん？

「・・・あ！生徒会会計の近藤政志（こんどうせいし）の弟、近藤圭吾（こんどうけいご）さんだ」

「せ、正解。よく知ってるな。兄貴の名前は知ってても俺の名前を知ってる奴は少ないんだが」

「いえ。お兄さんから散々話を聞かされていたので覚えてたくなくて覚えてしまいました」

私がそう言って微笑むと近藤君は驚いた表情を見せた。でも驚きの理由が2つあった。1つはこの笑顔。もう1つは

「あんた、兄貴と仲いいの？」

「はい。よくお話します。お兄さんは弟さんの話ばかりするので一度会ってみたかったですよ」

近藤政志とは実は中学校からの付き合い。ちょっとしたきっかけで仲良くなって、普通に話が出来るなか。この高校を選んだのも政志先輩が来ないか？って言うってくれたからだし。知り合いがいらないよりいた方がいいと思って私もこの高校を選んだ。

「今日、生徒会に行きますが一緒に行きますか？」

「そんなに簡単に入れてくれるのか？」

「私がいえば大丈夫だと思いますよ。お兄さんもいますし」

「じゃあ行こうかな。昼、ここに来るから」

「はい。でわ」

私は周りの人の事を忘れていたが、周りはこの会話をしっかりと聞いてたらしい。

『無の女って何者！？あの生徒会に普通に出来るなんて・・・』

『てか、今笑ったぞ！なにあれ！？超可愛くないか！？』

『マジ可愛い！何あれ？突然どうしたんだ？』

なんてみんなが思ってるなんて私は全然知らなかった。私は振り返ってヒソヒソ話してる人達を見てもう1回微笑んだ。近藤君は言ったとおり昼に来て一緒に生徒会室に行った。私は大きな弁当箱を数個持って。

「失礼します。皆さん持ってきましたよ」

「お！静香！来たか。早く弁当くれ」

「はいはい。政志先輩、弟さん連れてきたよ」

私が言うと政志先輩はえ！！！と言って私の後ろにいる近藤君（弟）を見てもの凄い驚いていた。

「何で圭吾がこんなところにいんだよ！？」

「私が連れてきました。あ、あの事いいましたよ」

「おう兄貴。俺の話を他の奴にぺちやくちゃ喋ってんのかあ？」

「えっいや、これには訳があつてだな・・・ぎゃー！！静香！助けて！」

「嫌です。面白いですもん」

私は政志先輩に満面の笑顔で言う。あゝ面白い！政志先輩は弟にだけは弱いんだよねゝだからいじりがいがある。そんな私の笑顔を見

て椅子に座っていた人は立ち上がり2人を止めた。

「もゝ何で止めたんですか！会長！」

「静香、お前はただ面白がってるだけだろう。政志、弟を好きなのはいいが好きすぎだ」

「ちよっ会長！そんな事言ったら・・・」

「兄貴、家でぶっ殺す」

会長と呼ばれてるこの人は加藤康祐先輩かとうこうすけ。この人は冷静でクールで、いっつも私の楽しみの邪魔をしてくる。

「会長、会長のせいで面白かったのが台無しです！」

「うるさい。それより静香。昨日何があった？何で今日は笑顔で登校なんだ？」

会長が聞くと政志先輩も近藤君もコツチをパッと振り返ってうんうんと頷いた。どうしようか考えた私はま、いっかというか事になり昨日の事を話し始めた。

「つと北原君に言われたからです。彼のアドバイスは何かぐつと来るので」

「そういう事か。お前、それを信じて笑顔で登校してきたんだな？」

「はい。つというか会長？何ですかその黒いオーラは・・・え、ちよっ！政志先輩！」

会長は何故か黒いオーラを出しながらだんだんと私に近づいてくる。とっさに私は政志先輩を呼んだ。呼んだのに・・・

「俺を遊んだ罰だ！行けっ会長！」

「え！何それ！？酷いですよ！会長も来ないで下さい！うっうわゝ

！」

何、ヤバイ！会長が黒いオーラ全開にして近づいてくる！うっわ泣きそう……。ヤバイ、マジで涙でそう。そう思っていると私の目の前に壁が出来た。

「会長！桃井の事いじめないで下さいよ！」

もう、助けてくれるなら誰でも良くなって私はその壁にしがみついた。ちよつと涙出てきたし……

「うう……。会長のバカ」

「はいはい、大丈夫だから。会長のせいで泣きましたよ」

「ふん、知るか。静香がそんな奴のいう事聞くのが悪い」

「何ですかそんな奴って第一、何で会長にそういう事言われたいといけないんですか！」

私は目に涙をためて反撃。勿論、壁というか近藤君にしがみついて。

「だから前からいってるだろう、お前の事が好きだって」

「その冗談はいりません！どうしてなんですか！？って近藤君？どうして頭をなでてるの？」

「いや、桃井のその姿が可愛いな〜と思って」

「何で近藤君まで冗談を言うの！？うわっ！会長が怖い……」

何か分からないけど会長の表情が怖い……。怒ってる？何で！？コッチが怒りたいんですけど！？そんな事をしているうちにチャイムが鳴った。

「チャイム鳴りましたので失礼します」

「あ、静香帰れないぞ。ついでに圭吾も。では本題に入りますか」

「ああ。桃井静香は生徒会書記、近藤圭吾は生徒会会計に任命する。政志、お前は副会長だ」

「は?!」

私と近藤君の声がハモリった。だってもの凄いいきなり言われたし政志先輩が副会長!? 第一、何で3年が会長だけしかないの?

「後、一応言っとくが俺は2年だからな」

前言撤回。何で生徒会に3年が一人もないの!? 4人いる中で2人は1年ってどういう事!? 久美子さんもよくこんな生徒会を許してくれたな。

「もう決定事項ですよね?」

「ああ、変更は不可能だ」

「では仕方ありません。私、桃井静香は一生懸命努力し、書記という役目をこなすと同時に生徒会の役に立つ事を誓います。近藤君も言って下さい」

「ああ。俺、近藤圭吾は一生懸命努力し、会計という役目をこなすと同時に生徒会の役に立つ事を誓います」

「よし。2人とも儀式したし、今から仕事だよ。だからこの後の授業は出れないからね」

そう笑顔でいう政志先輩。私が勉強は出来るかと聞いたら笑顔でも出来ると言った。

「それって要するに暇って事なんじゃないんですか?」

「正解だ。だから何してもいいぞ。この空間では」

「じゃあ次から勉強をしてもいいでしょうか」

「却下だ。何でこんな楽な空間でそんな事をしなければならぬ」  
「今、なんでもしていいって言ったの会長ですよ！っと言うか当然です」

なんて事を言っているとだんだん黒いオーラが出てきそうなふいんきだったから仕方なくこの話はやめた。この後、本当に何もやる事が無く、超暇だった私と会長を除いた2人はすぐさま夢の中に落ちていった。さすが兄弟というべきか。

## 06 (前書き)

今回は主に生徒会での話です。

しばらくは生徒会メインかと思います

「会長。あの2人起こしてくださいよ。全然起きません」

「スリッパかせ」

私が会長にスリッパを渡すと会長は2人の頭をもの凄い勢いで叩いた。すると政志先輩は慣れている様で頭を少しさすりながら起き上がったけど、近藤君は慣れてないから涙目になって頭を凄い勢いでなでてる。うん、あれは絶対痛い・・・！そんな近藤君を見て政志先輩は会長に怒っている。

「お前、手加減しろよ！！」

「自分で起きないから悪いんだ。大丈夫。すぐ慣れる」

「いや、だからって最初の方は手加減したれよ」

「・・・分かった。次はさっきの半分にする。それならいいだろ？」

会長がそういうと政志先輩は納得したように頷いた。それより一つ言いたい事が・・・

「会長。理事長から連絡です」

「何だ？」

「生徒会全員で理事長室に来るようにと」

私は携帯の画面を見る。そこには久美子さんからのメール。『生徒会全員で理事長室に来るように康祐君に言っというて』久美子さんは何故か私の携帯にメールしてくる。会長のアドレス知ってるはずなんだけども・・・

「静香、お前、これだいぶ前じゃねえーか！！」



「あゝ本当ですね。大丈夫ですよ。あの人は気が長い方ですから」  
「気が長いってな・・・2時間前だぞ!？」

〃〃理事長室前〃〃

2人は青い顔、1人はいつもと変わらずもう1人は興味津々な顔。  
私達は今、理事長室の前にいます。会長と政志先輩の顔が青いのは  
気のせいだろうか？近藤君は落ち着きが無い。久美子さんは何時間  
でも待てる人だから大丈夫だと思うけどな。私が考え込んでいると  
会長が行くぞと声をかけドアをノックし自分から入って行った。

「おい静香。理事長は気が長いんじゃないのか・・・？」

「私知ってる限りでは気が長かったと思いますけど。違いました  
か理事長」

「久美子でいいわ。それよりどういうつもり？ええ。気は長い方だ  
わ。でも『至急』と書いたら別よ」

そこで皆、理事長が怒ってる訳が分かった。いくら気が長い人でも  
至急と言ったのに2時間も待たされれば怒るだろう。皆がそう思っ  
た。

「すみません。で久美子さん。至急とは大事な用なんでしょう？」

「先日、どっかのバカが不良相手に喧嘩を売りその喧嘩売った相手  
を脅し負かしたという事件が発生したの」

あれ？その話に似た様な話を最近聞いたような・・・？いや、体験  
したのかな？うゝむ、どうだったかな？

「その相手が帝光学園なのよ」

「帝光学園!？」

説明しよう。帝光学園とはこの県内で1、2を争うほどの不良校。伝説の不良達は、ほぼこの学園出身だという。その不良校に喧嘩を売った。しかもこの学校の生徒が。そいつむっちゃ度胸あるじゃん！！

「まあ、不良の証言によると『目は人を見下すような目をしていて、口元は笑ってて髪の毛はこげ茶。その髪は腰の辺りまで伸びていた』だそうよ。私には目の前にその証言と一致する人物がいる様に見えるんだけど？気のせいかしらねえ静香」

「あ、あはは・・・」

私の今の顔は苦笑いというか完全に引きつっているだろう。だって久美子さんの背後に今まで見た事が無いような何とも言えないローラが・・・正直に言うとは絶対怒ってる。だって怖いし！！つというか思い出した・・・あいつら帝光だったのか！にしては弱かったんですけど。

「どういう事か説明してもらおう。静香」

ありゃ・・・余計な人までも怒っております・・・何ていうか久美子さんと会長がコンビ組んだら最高だね。悪い意味で。私は仕方ないからその日あったことを話した。その日あった事と言っても不良をけるところからだけど。

「ほう。それが真相か。でも何でいきなり飛び蹴りなんだ」

「いや、その方が手っ取り早いかと・・・で、でも喧嘩に勝ったしあれ喧嘩じゃなくて私が一方的にしましたよ？だから何ていうか喧嘩は売ってません。助けただけだし・・・」

「一方的って・・・静香！そっちの方がダメに決まってるでしょ！

！もう静香のせいで最悪な事態になったんだから」

その言葉に生徒会の皆が反応した。最悪な事態・・・いつの間にかふざけていた全員が真剣な表情になった。

「久美子さん。最悪な事態って？」

「あら：つい言っちゃったわ。まあ仕方ないわね。実はこれをあなた達に言おうかどうか迷ってるのよ。それでも聞きたい？」

勿論、私達の返事はイエス。元々私が起こした事だし私がそう返事をする事くらい久美子さんはお見通しだろう。私達が聞いたのはこの学校の生徒に危険を及ぼすかもしれない内容だった。それは私が帝光学園に行く事。転校とかそういうのじゃなくてただ、帝光学園に行けばいいだけ。もしそれを私達が断ったらこちらの学校に踏み込んでくるという事。パツと見ると私が行けばいい話。でもそれが罠だったとしたら大変な事になる。でも断ったら学校に被害が及ぶ。この話は簡単そうで複雑、判断しにくいのだ。

「・・・私が行けばその問題は解決するんですね？」

「するね。するけど行かせないよ。1人ではね。教員が無理でも生徒会は全員行かせるわ」

「何故ですか？この事態を招いたのは私。私が不良に喧嘩を売ってなかったら済んだ話でしょう。自分の起こした事は自分で責任を取ります」

「ダメよ。あそこだけはダメ。絶対あなたが危険な目に遭う。そんな事が分かっているあなたをそんな危ない所に1人で行かせる訳が無いでしょう」

そんな事を言い合う私と久美子さん。普段おっとりしてる久美子さんの口調がちょっと厳しいものに変わってる事からかなり危険なの

だろう。それでも私は1人で行かないといけない。誰にも迷惑はかけられない。

「久美子さん、1人で行かせてください。必ず無事に帰ってきますから」

「ダメ。本当にダメよ。必ず3人以上で行きなさい。必ずよ」

「理事長！！いくら理事長命令だとしても私は1人で行きます。明日うかがうとお伝えください」

私はそういつて理事長室を出た。呆然と私と久美子さんの話を聞いていた会長、政志先輩、近藤君。そして最後まで1人で行くのを許しなかった久美子さんを置いて。私が最後に久美子さんの事を理事長と呼んだのは覚悟が出来たから。どんな危険だと分かってても行く覚悟が出来たから。

「久美子さん怒ってるだろうな・・・でも仕方ないよ。仕方ない。私が起こした事だし」

私の頬に暖かいものが流れた。それは止まることなくドンドン、ドンドン流れていく。本当の事を言うのと怖い。あの時は人助けだったから自分の事なんて考えていなかった。でも明日は違う。自分が危険だと分かってて行くんだから怖くないはずが無い。でもあそこで強気にならないと関係ない人まで巻き込む可能性がある。怖い思いを心の内に押し込んで封印していた。かんなに感情があらわになったのは初めてだ。恐怖だけが今の私を支配している。

「・・・ヒック、うう・・・」

「・・・泣くほど怖いなら素直にそういえばいいだろう」

その声にビクビクして後ろを振り返った。その声はいつも落ち着い

ていて冷静で、でも温かみがある会長の声だった。私が振り返ると会長が私の後ろに立っていた。すべてを見抜いていていたかのような目で。

「そ、そんなの、いえる訳、無い、でしょう！だ、から、強がった、のに・・・何でくる、んですかぁ」

泣いているためどうしても言葉が詰まってしまう私を見て会長は小さく笑い言った。

「お前、理事長と喋ってる時、手が震えてた。あの話を聞いてからな。それで怖がってるって分かったんだよ」

「そう、ですよ。怖い、です。怖く、無い、はずが無い、でしょう！」

私が言い終ると同時に暖かい物に包まれた。会長に抱きしめられたと分かるのに結構時間がかかった。私は会長の表情が見えない。

「会長？どう、したん、ですか？」

「何でもない。静香が落ち着くまでこうしといてやる」

そう言った会長の腕に力が入った。私を包んでくれる腕に。気づいたら私は会長にしがみついて泣いていた。多分その涙にはこれまで溜め込んだ不安や悲しみも入っていたと思う。会長は泣いてる私の頭を撫でてくれていた。いつまでも、私が泣き止むまで。

## 06 (後書き)

ヤバイ・・・もう完全に静香のキャラ崩壊？

ヤバイなあ・・・

「みつともない所を見せてすみません」

「みつともなくなんか無い。怖かったら泣けばいいし何より可愛かった」

「いい台詞が最後の言葉で台無しですね。では私は帰ります。明日は学校、休むつもりですよ」

そういつて私は会長と別れた。散々泣いた後、何故か会長が優しくったりしてちょっと不気味だった。普段はそんな所を見せないのだから余計にビクリしたし。でも、怖いという感情はそれで消えて助かった。

〃〃次の日〃〃

「ここが帝光学園・・・」

私は今、帝光学園の門前にいる。流石、不良で有名な学校だけあって不良がそこらじゅうにうじゃうじゃ・・・私は生徒会の場所が分からなかったから生徒に聞くことにした。私が驚いたのはこんな不良校でも生徒会が存在すること。ないと思ってたから。

〃〃10分後〃〃

「やっと着いた・・・」

私はそう呟き、そのドアを軽く2回叩いた。すると、無言でドアが

開き私は中へと入って行くと椅子に座ってた男が私を見て立った。

「始めましてだな。俺はこの学園の生徒会長をしている烏丸悠斗だ」  
「西南高校で生徒会会計をしています。桃井静香です。今日はどうか？」  
「あった用事でしょうか？」

私の目的はこれだ。挨拶など交している暇はない。私がいうと立っていた烏丸会長が座り私にも座るように言った。私が座ろうとしている時に烏丸会長が言った。

「そうだな。その前にうちの生徒をボコるのはやめてくれないか？」  
「・・・ボコったのではなくてボコられそうになったのを反撃しただけです。第一、道を聞いただけで襲いかかる方が悪いのではないのでしょうか？」  
「・・・そうか。それは悪かった」

そう言って烏丸会長は頭を下げた。いやいや、そこまでしなくても・・・。私も焦ってたみたいだけど私以外の人も焦ってた。烏丸会長が頭を上げて一安心し、それから用事を聞いた。

「一昨日、西南高校前で不良を2名、ボコったのはお前で間違いないんだな？」

「はい。えーっと確か『コウキ』とか言っていましたね。一番強そうな奴は。多分」

「合ってる。お前はこの学校の生徒会の基準って知ってるか？」  
「一応は」

不良校では良くある事。その学校で1番強い者がトップ、つまり生徒会会長になるって事。多分この学校もそうだと思う。



「じゃあここにいる奴らの事は知ってるか？」

「すみません。正直、誰一人知りません」

私が言うと烏丸会長以外の生徒会の皆さんはむっちゃ驚いた顔をした。え・・・そんなに驚かれても。多分、私が知らないだけだろうけど驚きすぎだと思う。

「お前が一昨日、ボコボコにした奴は生徒会副会長だった」

「え！？それって・・・」

「この学校で2番目に強い男だったと言う訳だ」

私は知らないうちによその学校の副会長さんをボコってた訳ですか・・・なんか悪い事をしたな・・・えっとコウキ君だったっけ？なんかすみません。っと心の中で謝ってる最中、烏丸会長がとんでもない事を言った。

「どうせお前にこの学校に来いと言っても断られるだけだから俺がお前の学校に行く事にした」

そう笑顔で言う烏丸会長。何故か私を睨んでる生徒会の皆さん。そして状況についていけない私。

「いや、来ないで下さい。困ります」

「何故だ？」

「何故って当たり前でしょう！会長がそんな簡単に転校とかしていいわけないでしょう！第一、生徒会とかこの学校の皆さんは良いつて言ったんですか？」

「言った。なあ？」

烏丸会長がそういつて生徒会の皆さんの方を向いた。途端に皆さんの顔が歪み、苦笑いで全員、首を縦に振った。絶対、睨んでるよね。烏丸会長。じゃないと顔が歪むはずがないし。第一、良いって言ってんだったら普通に笑顔のはずだし。

「烏丸会長。私が質問するので烏丸会長はこの部屋の外で待ってて下さい」

「何故だ！？何故この俺がお前のいう事を聞かなければならない！」

「いいから出て行って下さい」

私は低い声でそう言い、烏丸会長を睨む。すると嫌がっていた烏丸会長は瞬時に外へ出て行った。おおく効果抜群。これは近藤君が教えてくれた。近藤君は昔、結構有名な不良だったらしいから。私は烏丸会長が出て行ったことを確認して生徒会の皆さんの方に振り向いた。

「さて皆さん。本当の気持ちを教えてください」

そうして烏丸会長の転校をどう思ってるか聞いた。すると面白い事に皆、猛反対でした。やっぱり怖くて言えなかったらしい。そりゃ睨んでいわれたら怖いよね。生徒会の人によると睨んでくるしオーラも出てるらしい。私には分からないんだけど。

「烏丸会長、入っていいですよ」

「で、何が決まったんだ？」

「烏丸会長の転校には反対という意見ですよ。よって転校はなしになりましたから」

「誰がなんと言おうと俺は転校するぞ！」

さっきのしっかり者の烏丸会長はどこへやら、子供っぽくなってし

まいりました。

「いや、無理ですから。何を言おうと転校出来ませんよ」

「いや、俺は絶対に転校・・・」

烏丸会長が全部いえなかったのは私がもの凄く睨んだから。これが効果ありだと分かってやらない人はいないと思う。・・・多分。こうして何とか、烏丸会長の転校は無になった。それから、いろいろとしてから私は学校に帰れた。

## 07 (後書き)

何か落ちありませんね・・・

すみません＞＜

私は昨日、帝光学園の生徒会会長に転校するのを諦めてもらった。そうだよ。諦めてもらったよね・・・

「何でいるの!？」

私の目の前には何故か帝光学園の生徒会会長が・・・何で!? いやもう、私の頭の中は分からない事だらけなんですけど。なにこの状況。しかも何でうちの会長と睨みあってるのかなあ? ヤバイ。周りの生徒が怖がってるんですけど・・・。

「いやいや会長! 何してんですか!」

『睨みあい』

綺麗にはまりましたね・・・私の呼び方が悪かった。私が聞きたかったのは帝光学園の烏丸会長に話をしたかったんですがつい会長と呼んだからうちの会長も反応してしまった訳ですね。

「すみません。私の呼び方が悪かったです。何をしていますのですか、烏丸会長!」

「何って・・・」

その後が続かなかった。つまり特に何もないってことだろうな。この会長だったら。昨日初対面なのに大体は性格が分かった気がする。何で? それはこの会長がわかりやすすぎるから。

「加藤会長も睨んでないで教室に行ってください。烏丸会長は帰ってください」

「いや、俺はこのアホが帰るまで静香からは離れん」

「俺はまだ帰らないぞ。この学校を見学に来たからな。後、アホって言うなボケが」

ボケって言った烏丸会長をうちの加藤会長が睨み、烏丸会長もうちの会長を睨みまた睨み合いが始まった。また周りの生徒は怖がり始めたし・・・しかもここ校門ですよ！？何で先生達もこの状況を止めないかなあ！？っと内心イライラしているものの面倒な事になりそうなので2人をおいて自分の教室に向かうことにした。

「・・・は？」

私が驚いたのは教室の中を見渡すとわかる。そこにはこの学校にいるのは珍しい不良が・・・それも私が知る限り生徒会のメンバーだった気がする。多分。私が教室の入り口で固まっていると不良（多分生徒会の人達）が私に気づき私の方に歩いてきた。そして私に向かってお辞儀をした。その行動に私を含め教室中の人が驚いた。

「私は生徒会新副会長の青葉瑞穂あおばみずほです。よろしく」

「はあよろしくお願いします。昨日も言ったと思いますが生徒会書記の桃井静香です。それでどのようなご用件でしょうか・・・」

「うちの会長といえますか僕達生徒会を一日西南に置いて頂けないでしょうか？」

「え！？」

てか、何で私に言う！？私はそこまでの権力ありませんけど。私に言われても無理だと思うけどな・・・しかし、この副会長さん青葉さんだっけ？むちゃくちゃ礼儀正しい。しかもこれで副会長ね・・・

この人どんだけ強いんだろう？ 凄いな！ いやいやそんな事に関心してる場合じゃなかった。

「あのそういう事は会長に言って頂かないと私では判断できないんですよ。会長の所へ案内しますから会長本人に言って下さい」

私はそう言って青葉さんを会長の元へ連れて行くために教室を出た。教室を出た所で近藤君が何故かコッチへ走ってきた。

「静香！ 大変だ！ 会長が帝光の会長と言い争ってる！」

「そのどこかヤバイの？」

「いや、とにかくヤバイんだって！ とりあえずいけ！」

私は近藤君に帝光の生徒会を預けて廊下を全力で走り会長達の元へと走った。何かわかんないけど行かないといけない気がした。私は走って校門に行った。そこで見た光景は・・・

「・・・何してんですか？」

「腕相撲？」

私の怒りというかイライラというかそういう感情が爆発しそうだった。まずはこの生徒会長の2人に、次は近藤君かな。これのどこがヤバイの！？ まったくやばく無いじゃん！ とそう思っているうちに近藤君を含む帝光の生徒会が到着。

「近藤君？ どこがやばいんですか？」

そう言ってニツコリと笑う。結構怒りが露になってる気がするが気にしない。てか出してるし。近藤君はと言うと固まって動かない。顔が少し青ざめてて多分、目が会長に助けを求めている。

「どこがやばいんですかと聞いています」

「い、いや、その・・・会長が」

「会長が？会長。どういう事ですか？」

「え、いや、烏丸会長が話があると・・・」

「おい！俺に振るなよ！ちよっマジヤバイって！」

私は訳の分からないことを言ってる会長達に（・・・）近づいて頭にパンチを食らわそうとしたが何故だか手が動かなかった。別に誰かに掴まれてるわけじゃない。殺気がして殴れないのだ。いや、会長はわかるが烏丸会長が何で殴れないかは分からない。私は殴るのをやめて後ろを振り返った。そこで殺気の発信源を探す。殺気の発信源はあっさりと見つかった。だってそこから殺気がバンバン流れてたし！その人は結構背がでかくて私を見下ろす形になった。

「青葉さんこの人は・・・」

「え？ああ、この人は3年の」

「西条学だ。さいじょうまなぶうちの生徒会長を気安く触らないで頂きたい」

うわぁ青葉さんもそうだけどこの人も不良には絶対無い口調だよね・・・でも青葉さんとこの人は種類が違う。青葉さんはおっとりしててどこで使っても大丈夫な喋り方だ。この人は丁寧だけど声が出なくなるほどの迫力がある。普通の人ならば怖くて何もいえないんだろうけど私は違う。

「何もしていなければ触りませんよ。何かするからです。それにしてもあなたはいつも殺気を送るだけなのですか？そんな事をする前にあなたが烏丸会長を止めてください」

「・・・あんた凄いな」



いきなり西条さんの口から褒め言葉が出てきて正直ビックリした。だってさっきまでもの凄い殺気を送ってきたのにその人からいきなり褒め言葉が出てきてもビックリするだけだ。青葉さんも驚いたみたいで固まってる。私は訳が分からなくて首をかしげていると青葉さんが戻り説明してくれた。

「西条先輩は怖がられる事が多いんだよ。それは桃井さんもわかってるよね？」

私はコクンと頷く。さっきも話したとおりに迫力があるから。だから怖がられるんだと思う。

「今まではさっきの桃井さんみたいに言い返す人がいなかったから西条先輩も驚いて凄いいったんだよ」

「あ、そういう意味ですか。言っておきますけど私も初めは怖かったですよ？でも、西条さんって本当は優しい人ですよ？だから安心して言うか怖いのはなくなりました」

正直言うところ初め見た時はもの凄い怖かった。だってもの凄い睨まれてたし。でも話を聞いていると何か分からないけどこの人は優しいと思ったから言い返せただけだし。

「西条先輩は優しいですよ。本人は照れて認めませんけど」

「その事を普通、本人の前で言うか？」

苦笑いしながら言う西条さんを青葉さんは笑ってスルーしていた。それにしてもこの2人はまともだな・・・あの烏丸会長とは大違いだね。なんだろうこの差。

「そういえば桃井さんって1年生でしたよね？」

- ・ 青葉さんがそう聞いてきたので私はコクンと頷いた。だって普通に1年だし。そこで青葉さんに頼まれたのは青葉さんや烏丸会長その他の1年生に勉強を教えて欲しいそうだ。烏丸会長は納得できたものの、青葉さんが勉強できないとは以外だった。何か出来そうじゃない？青葉さんだったら。で、ただいま生徒会室を借りて勉強中・

## 08 (後書き)

続きます。次は勉強してるところですかね。

「烏丸会長・・・あなた凄いですね」

この凄いは悪い意味での凄いだ。青葉さんに頼まれて勉強を教えようとした私はまず、皆さんの実力がどれくらいだろうかとテストをした。高1で出る普通の問題。このテストで合格点を出したのは青葉さんを含め2名。今、私が勉強を教えているのは8名。何ていうかもうがっかりだわ・・・

「というか先輩方もこういう事ですか！この点数は！」

そう。この勉強会には先輩方も参加しております。帝光のね。しかしこの点数は酷すぎだろう。もうちょっとで一桁って・・・

「先輩方はまあ良しとしましょう。・・・喜ばないでください！烏丸会長。あなた人の事からかってますけどあなた無得点ですよ？」

「何！？全部埋めたのか！？一個も当たらなかったというのか！」  
「やっぱり適当に書いたんですね！だから言ったじゃないですか『凄い』と。見事に正解を避けています」

先輩＆青葉さんを含んだ1年生は全員納得したように頷いた。皆、私の凄い発言の意味が分かったみたいだ。いやホント凄いなと思うよ烏丸会長は。だって見事に正解をはずして無得点なんだよ。笑えるよホント。本人はもの凄い落ち込んでる。

「烏丸会長はまず、その適当に書くのをやめて下さい。はあどうしましうかね・・・」

本当にどうしよう。どう勉強を教えていいか分からない。

「青葉さんどうしましょう？」

「何でそこで私に聞くんですか。そうですね・・・会長はまず基礎からしてはいかがでしょうか？」

「基礎・・・そうですね。そうしましょう。烏丸会長！だらっとしてないでこの教科書の一番初めの問題から解いて行ってください。サボったら・・・どうなるでしょうね？」

私はそういつて教科書を渡しながら笑う。えっと黒い笑いつてやつ。その瞬間、烏丸会長が教科書を取って引きつった笑を私に見せた。別にそういうふうにならなくても・・・ちよっと傷ついた私であった。

「てか静香。何で俺の事、烏丸会長って呼ぶわけ？」

「だって会長でしょう？だからですけど」

「いやいや、何で烏丸か聞いてんだけど。悠斗でいいじゃん。同い年なんだし」

「は？何で私がそんな事言わないといけないんですか。さっさとして下さい」

「何だよそれ。いいじゃん」

「文句言わないで下さいよ・・・じゃあ、この問題を5分以内で解いたら呼んであげます」

私が渡したのは今の烏丸会長にはちよっと難しいと思う問題を紙に書いて烏丸会長に渡した。烏丸会長の顔が歪むのを見ると私の顔がニヤける。時間を計って青葉さんや他の人達の所に行き一緒に座った。

「桃井さん・・・会長の扱い方が分かってますね」

「いえ、烏丸会長の扱い方は分かってないです。ただ似た様な人が周りにいるんですよ」

「そうなんですか。私達では手に負えない会長をあんふうに出来るのは桃井さんだけですよ」

烏丸会長の様な性格の人は私の周りで結構いる。家族もそうだったりするから。後は天王寺かな。天王寺と烏丸会長は結構似てるからさ。

「烏丸会長ー！後、1分ですよー」

「・・・出来た！！」

「えっ嘘！」

私は烏丸会長が持つてる紙を奪い取って見てみた。凄い。全部あつてる・・・烏丸会長はやれば出来る人なんだな。よし、この調子でやってったら大丈夫だろう。

「烏丸会長、全問正解ですよ！凄いですね！」

「悠斗！そう呼ぶ約束だろ？」

「分かりましたよ・・・悠斗さん」

さすがに他校の会長を呼び捨てには出来ないのですん付けにしたところ、それが気に入らなかったのか悠斗さんは不機嫌そうになった。それでも私はさん付けで呼ぶけどね。

「悠斗さん早くこの問題してください」

「嫌だ。俺は寝る！」

あなたは駄々こねる子供か！私はそう思いながら悠斗さんの頭を叩かせてもらいました。勿論、生徒会の皆さんに許可取りましたよ？  
じゃないと叩いた瞬間にやばい事になりそうですもん。

「いい加減にして下さい！誰のために勉強を教えてると思ってるんですか！私の授業時間まで削って！」

「知らん！別に俺は頼んでいない！」

「・・・そうですか。それでは私は教室に帰らせて頂きます。余計な事をしてすみませんでした烏丸会長」

そういつて私は烏丸会長にキレた状態で微笑んだ。そして教室へと帰った。教室に帰ると、まだ戻ってこないと思っていたのか皆がビツクリしていた。私は謝りながら自分の席に座った。そうして普通に授業を受けた。チャイムがなると同時に授業が終わったのでクラスにいる生徒達はそれぞれ色んな事をしている。

「もうもいさんっ！お喋りしよー」

「いいですよ久遠さん。っと言うか1時間目のノート見せてください」

「いいよー私のでよければ。はい。それにしても帰ってくるの早かったねー！もっと遅いって理事長が言ってたんだよ？何かあったの？」

「ちょっとムカついたので帰ってきました。ホント意味が分かりません。もう何ていうか苦手なタイプです」

そんなに苦手ではないのだけれどどっちかといえば苦手なタイプに入る。私は元気な人とかは苦手なんだと思う。久遠さんはふーんっ

と言ったきり喋らなくなってしまった。そして喋ったかと思うと驚く事を言い出した。

「え？ 烏丸会長に会いたいんですか？」

「うん、そう！ 桃井さんがムカつく人って見てみたいんだ！ ダメかな？」

「・・・連れて行くだけならいいですよ。それにしても久遠さんって変わってますね」

「何で？ 私は普通だと思うけどな？」

「いや、皆は普通に怖がりますからね。変わってますよ」

私がそういうと久遠さんはそっかーと頷いて納得したようだ。それから久遠さんといろんなことを話して最後に聞かれたことがあった。

「何で敬語なの？ この前は普通に話してたのに」

「癖みたいなものです。私は人が大勢いる所だと敬語しか話せなくなってるんです」

ふーんと言う久遠さん。これは多分、小さい頃、皆に敬語を使っていたからだと思う。家でしか普通に話さなかったから敬語に慣れちゃったと言うか。そんな感じで人が大勢いる所では敬語が当たり前になってしまった。勿論、年上とか偉い人とかには意識して使ってるけど他の人は無意識というか。勝手に口から出てくるって言うか。

「でも意識したら直るよね？」

「まあ直ると思いますけど結構時間かかります。一応、癖ですからね。ノートお返しします」

「はいはい。ノーと貸したお礼に放課後付き合ってくれない？」

「あ、無理ですね。予定あるので。明日ならいけると思いますよ」



私が言うのと久遠さんは不満そうな顔をしたけれど明日の放課後でOKしてくれた。今日はどうしても外せない用事がある。それは家の母の誕生日なのだ。母は誰かの誕生日とかを祝わないと怒り出すタイプの人で家族の誕生日は必ず家族で祝う事になっている。そして今日は母の誕生日。どうしてか母の誕生日だけは私以外の皆のテンションが異常にあがる。誰の時でもテンションは高いのが家の家族なのだけれども何故か母の誕生日だけ、異常にテンションが上がるのだ。父は母が大好きなので分かるのだが他の家族（兄とか姉とか）は意味が分からない。アホかって思うほどテンションが上がる。そのの相手をするのが私だから疲れる。だけど仕方ない。なんだかんだで皆楽しそうだし文句とか言えないし。私も楽しいし。そうして私は疲れるやら楽しいやら複雑な感情が混ざりながらテンションが高い家族の元へと帰るのであった・・・

## 09 (後書き)

烏丸会長と静香の関係は置いて！次回、ついに家族登場ー！

09じゃなくて10だ。10話にしてついに家族登場ー！  
ちょっと遅い？って気がするんですが気にしませんっ！

でわ次回ー

## 10 (前書き)

今回、短め。そんなに家族の出番ない・・・

「ねえ静香！この子のあだ名王子っていうの？」

「お母さん！こっちの子は陸上部のエースなんだって！」

「母さん！この子は姫って呼ばれてるんだそうだ！」

上から母、姉、兄。そして文の内容で分かると思うけど久遠さん、天王寺、北原が家に来ている。どうしているかって？それは30分前にさかのぼる。

「「「お母さん誕生日おめでとう！！」」」

母以外の家族が揃って言う。今は母の誕生日パーティー中。それぞれ、さっきと同じ言葉を言いながら母に誕生日プレゼントを渡していく。勿論私も。私は今年、母が欲しがっていた人気アイドルグループのCDをプレゼントにして渡した。プレゼントは事前に母以外の家族全員で何を渡すか言っているから被る事はない。私達から渡されたプレゼントを嬉しそうに受け取る母。これが毎年恒例の作業だ。けど今年違うといえば・・・

「兄さん就職おめでとう」

兄が就職した事だ。兄は去年20歳になりこの前まで仕事をするため勉強中だった。今は職について、認定試験とか言うやつに向けてまたまた勉強中。兄は、昔は無口だったらしいけど今では普通に人

だ。明るいし、元気だし。前に、家族全員無表情といったがそれは間違いだった。ただ私が知らなかっただけで私以外の家族は普通に感情を出しているらしい。だから無表情ではなく、表情豊かだった。

「ありがとう静香！でも今は母さんの誕生日を祝おう！なあ瞳！」

「そうよ！お兄ちゃんの就職よりお母さんの誕生日！」

いや、私には就職の方が大事に思うんですがねっとツツコミそうになったが心の中だけにしておく。ツツコムとまた余計な事を言っつきそうだからな。

「でわ今からお父さんより祝福の言葉が送られます！」

姉がそういつて父の方に目をやる。すると父が立ち上がって喋り始めた。毎年これだ。母の誕生日には父が祝福の言葉を送り、父の誕生日の日には母が祝福の言葉を送る。正直、なくteいいと思うのだけれど本人達と兄達がノリ気なので私が反対しても意味ないだろう。そんな事を思っていると父の話も終わり、ご飯を食べようかという事になった。そして頂きますを言おうとした瞬間、携帯の着メロが鳴った。その音を聴いた瞬間、これ私のだ！と思った私は家族にごめんとanて電話を取った。

「はいもしもし」

『おっ出た！静香俺だ』

そういつて電話に出た私が1番最初に聞いた声は私の悩みを解決してくれた人だった。って誰か分かる？その声は・・・

「何の用？北原」

『今、海と麻衣とカラオケで遊んでんだけど静香もこねえ？』

「はあ！？こんな遅くになに遊んでんの！バツかじゃん」

『あははっ！海と麻衣！俺の勝ちだ！』

「何、勝ちって？」

『俺たちが今遊んでるって言った時の反応がどんなのか賭けてたんだよ』

何やってんの、コイツら。私を賭けの対称にして話すな！

「ああそう。カラオケに行くのは無理。後、今後私をかけの対象にすんな！って母さん！？」

私が文句を言った直後、私から電話を取った母はさっきまでのテンションで電話越しの北見に話しかけた。

「誰？静香の彼氏？」

「かれっ！？ちよっ母さん！携帯返してよ！」

「やーよ。誰この子？」

「ただの友達！いいから返して！」

「えー友達？じゃあ他の子達も連れてきていいから家に来なさい！」

携帯に向かってそういう母。さ、最悪だー！これは母の悪い癖。自分が思ったことは即行動。最悪だ・・・暴走した母を泊められる人はいない。暴走したら最後、収まるまで放っておくしかないのだ。母は北原と喋った後、父に指示をして私に携帯を返した。そしてその10分後北原達が家に来て冒頭に戻るというわけだ。

「母さん！いい加減にしてよ！何ていうか・・・バカじゃないの？」

「母に向かってその言葉はダメよ！それにしてもあなた達カッコイいわねー！で、どっちが静香の彼氏？」

なっ！？何をとんでもない事聞いてくれんですか！この母親は！！

「母さん！友達！2人とも友達！！ていうか何で彼氏に見えるわけ？どう見ても不釣り合いでしょうが！」

「こら静香！自分をそんな風に悪く言うな！いつも言ってるだろう！」

「兄さんは普通にカッコイイでしょうが！あーもう！何なのホント！寝る！！」

皆の相手をするのが面倒になった私は自分の部屋に飛び込んだ。あの人たちの相手をしているとホントイライラしてくる。そしてそんな自分にもイライラしてくる。私はベットにダイブし布団を被った。まあ楽しいんだけどもイライラはする。気づいたら私は布団を被ってぐっすり寝ていた。

## 11 (前書き)

久しぶりの投稿。

最近どれも更新してなかったから話が全然わかんない・・・!!

登場人物も増えてきたし、そろそろ人物紹介作るかなー



私が眠りから覚めると目の前には久遠さんの顔があった。・・・どう考えてもおかしいよね！？私はガバツと起き上がり寝ぼけているのではないかと目をこすってみた。私が再び目を開けるとそこには・・・やっぱり久遠さんがいる。久遠さんは私を見て満面の笑みで言った。

「桃井さんおはよう！」

と。私もおはようと返したよ。ついでに何でいるの？という質問も付け加えて。そうすると久遠さんは満面の笑みから苦笑いをしながら言った。

「桃井さんが寝ちゃった後、私達は帰ろうって事になったんだけど桃井さんのお母さんが返してくれなくて、気づいたら王子と智宏がお酒飲まされて。それで酔っ払った2人とお母さんが飲み比べを初めて、2人が潰れて帰れなくなったから泊めさせてもらった」

うわぁ・・・何しちゃってんの母さん。未成年に酒飲ませて潰してよく久遠さんはお酒のまされなかったねと言うと兄さんが女の子に飲ませちゃダメだろうって言って母さんを止めたらしい。兄さんナイス！！

「で、2人は？」

「さっき起きてリビングで頭かかえてる」

あーあ。可哀想に。とりあえず私はリビングに向かうため布団を出た。そしてふと気づく。何でパジャマ？確か、ベットにダイブした

時は普通に服着てたよね？・・・あんのクソ兄だ。私は舌打ちをしてリビングに向かう。そしてリビングのドアを開け兄を探す。

「・・・兄さん。これはどういう事か説明してもらおうか」

「し、静香。これには深い訳があるんだ！だからその手に持つてるスタンガンをしまってくれ！！」

何故私がスタンガンを持つてゐるかって？それはこのバカを退治するためだよ。色々やられて絶えられる妹がいると思う？こっちだって我慢の限界なんだよ！！私は怒り狂ったまま兄にスタンガンを押し付け――

「ちよっそれはダメだろ」

られなかった。フラフラ、でも素早く私の持つてゐるスタンガンを取り上げた人物は机にスタンガンを置いて水を飲んだ。

「おい兄。スタンガンはなくなったけどこれはどういう事かと聞いているんだ。答えろ」

まあこれは怒っている時の私の喋り方で。兄さんの事を兄と呼ぶ。兄もこの喋り方は怒ってるって分かってるから顔が青ざめる。

「我が妹よ！これは俺だけではない！瞳も母さんも乗り気だったぞ！？」

「ほう。で？これは誰が着せた？」

「瞳と母さんだ！！俺は決して部屋には入っていない！！」

兄。我が妹よって何だよ。その場はスルーしたけど後々なって気になり始めたわ！！まあ昨日寝る前に読んだ本の影響だろうけどさ。

しかし我が妹はないでしょう。我が妹は。

「・・・まあいいわ。駅前のケーキで許す」

「うっ！・・・あそこ高いのに」

自業自得。私はそういつて兄の前に手を出した。渋々財布を取り出す兄。私はちゃんとお金をもらってから自分の部屋へ戻り制服に着替えて再びリビングに向かった。すっかり忘れてたけど今日学校あるんだった。

「行ってきます」

そういつて私は3人を置いて家を出た。何か、朝からあの3人といると絶対目立つだろうから。私が教室に入ると見てはいけないものを見た気がした。私は直ぐにそこから目を逸らし、自分の席に座る。そして鞆から本を取り出してそれを読み始めたとき周りがざわざわし始めた。・・・めんどくさい。私が顔を見上げるとそこには最近知り合ったばかりの顔があった。

「・・・まだ帰ってなかったんですか？」

「ああ。それより静香ちよつと来い」

「嫌です。私の貴重な時間」

そう言い黙る。私の前にいる立っている人は、烏丸会長。何故、まだ帰っていないのか。意味が分からない。正直、何か面倒な事になる気がするんで帰って欲しい。

「良いから来い」

「嫌です」

「良いから」

「嫌です」

「じゃあここで話す」

「嫌です」

私が答えた瞬間、烏丸会長は机に拳を打ちつけ、睨んできた。・・・私に効果がない事、この人分かってんのかなー？私はそれを睨み返しながら言った。

「第一、私の貴重な朝の時間を邪魔しないで下さい。っていうか邪魔すんな。正直言って烏丸会長ウザイです。もう用はないはずですし、いつまでもここにいられると他の生徒達がビクビクするので迷惑なんです。ここに必要ってあるのでしょいか？」

あくまで、言葉は丁寧に（一部丁寧にゃない所もあるけど）。遠まわしに（結構、ストレートかも）帰って欲しいと伝えた。私が喋っている最中、烏丸会長の顔はショックを受けたような顔になっていた。だって喧嘩してるとか関係なく帰って欲しいんだもん。

「桃井さん・・・ストレートすぎます。会長は以外に傷つき易いタイプなんですから」

「あーそうでしたか。それは失礼しました。ところでどの様なご用件で？早く済ませて欲しいのですが」

「・・・そのだな、昨日は俺が悪かったよーな悪くなかったよーな・・・」

？？言っている意味が分かりません。どっちなんですか。そんな感じで首を傾げてみる。すると烏丸会長はうっと唸り、暫くしてから聞き取れるか聞き取れないかギリギリの声で言った。

「・・・昨日は俺が悪かった・・・」

と。私は嘔き出しそうになった。だって、あの烏丸会長が、素直ではないかもしれないけど謝ったんだもん！あの無駄にプライドが高い烏丸会長が謝ったんだよ！？嘔き出したくもなるって！まあ我慢したけど。

「良いですよ。もう許します」

そういうと、パアツと明るい表情になった烏丸会長。・・・うん。何でか分かんないけど、尻尾が見えるのは私の気のせいだよね！？気のせいだよね！

「なら、もう少しここにいても」

「ですが、お断りします！」

「何で！？」

だって、元々喧嘩が原因で烏丸会長に帰って言ってたわけじゃないし。というか、また尻尾が見えた！しかも耳まで！垂れ下がったこの二つが見えた・・・。

「元々、昨日一日って約束でしたし。私は普通に授業受けたいですし、もう直ぐテスト期間なので」

「・・・最悪だ。何でその言葉を今出すんだよ！頭の隅に閉じ込めてたのに！」

「ああ、確かここと烏丸会長の所はテスト期間が同じでしたね。まあ頑張ってください」

「うわ酷っ！はぁ・・・仕方ない。とりあえずババアのところに行くぞ」

「何で久美子さんの所へ？私が呼ばれたんですか？」

「静香って言うか、ここの生徒会と俺ら」

んー・・・何だろう？まあ久美子さんのところに行ったら分かるか。  
こうして、私達は理事長室へ向かった。そこで目にしたのは・・・

「よっ！静香！」

「・・・ああ、隆之か。お前、何でいんの？」

「この学校に転校してきたからな。つか、お前、またネコかぶってた？」

そういつて隆之が指差した先には会長達がいた。あー・・・めんどくさいことになりそうだな。

「さあ？何を言ってるのか私には分かりませんね。それより理事長。どうしてコイツがここにいるのでしょうか？」

「ああ、それはね。話せば長くなる事もないけど面倒だから話さない。先に紹介しておいた方が良くないかな？」

「そうですね。紹介します。私の小学校の頃の同級生&私を虐めてた人です」

私が言うのと皆は驚いた顔をした。えっ本気にした？

「冗談ですよ？本気にしないで下さい。どっちかと言うと彼には助けて貰いましたからねえー」

「冗談って・・・お前、相変わらずだな。俺は西城隆之<sup>さいじょうたかゆき</sup>。今日からこの学校の転校して来たんでヨロシク」

「しかし、何で今の時期？隆之は確か、名門校に行ったんでしょ？」

「それは中学まで。高校は家庭の事情でいけなくて、久美子さんから入らないかって言われてテスト受けたら合格したんだよ」

「成程。じゃあ、校内案内は私がしましょう。知り合いだし、話す事も色々あるのでその方が都合が良いでしょう」

「そうだね。じゃあよろしく頼むよ、静香」

理事長にそう言われて私と隆之は理事長室を出た。出る途中、隆之が数人から睨まれていた気もするけど多分気のせいだと思う。こうして私達二人は校内をぐるっと回って最後に屋上へと向かった。

## キャラ紹介（前書き）

もう一つの作品と同じく読者様からキャラ紹介があったほうが良いと言われたので書きましたー！



## キャラ紹介

作「どうもー！作者の耶麻です！」

静「主人公の静香だ」

作「あれ？ここでは素？」

静「そうだぞ。さてキャラ紹介へどうぞ」

作「玲《あの子》違って文句なしだね・・・（しかも何か早い）」

もいしずか  
桃井静香

身長163cm 体重（・・・察して） 16歳 女

今まで人と関わるのを嫌いずっと無表情でいた。学校でのあだ名は『無の女』

実は口が悪く小さい頃にトラウマあり。自分を抜いた家族だけを美形だと思っており自分は平均だと思っている。

どっちかと言うと母親似で少し父親にも似ている。性格はもろ母親。容姿は顔は言うまでもなく美形。ただし静香の場合は無表情でいると怖すぎで近づけない。

髪は長さは腰位まであってその色は黒と茶色が半分ずつの茶色。性格は先程も言ったが母親そっくり。思った事は即行動。

後の事は後で考える。困った時は何とかなるといふ考えを持つ。

てんのうじかい  
天王寺海

身長173cm 体重65kg 16歳 男

静香のクラスに転校して来たなぞの人物。何故かこちらも本性を隠して生活している。

だが、当たり障りのない態度からクラスでは転校して初日で中心人

物に。

静香の前や自分の気分次第で本性を出す。

容姿は超が付くほどのイケメン。髪 of 長さは耳にかかる位の短すぎず長すぎず。

髪の色は金っぽい茶色。たまに光が反射すると金色に見える事も。

決して海はハーフではない。

性格は何でも後の事をちゃんと考えて行動。困ったら笑顔を見せたら大丈夫と訳のわからない考えを持っている。

基本的、アホではないが素モードの海は精神的なアホ。

堀場久美子<sup>ほりばくみこ</sup>

身長167cm 体重？歳（地獄を見そうになった・・・）女

静香の通う西南高校の理事長兼校長。実は校長もしていた久美子さん。

別に校長はいるのだがそれは久美子さんの身代わり。校長は色々面倒だそうで理事長になった。

静香とは小学校からの付き合い。静香のお母さんの親友。

容姿は綺麗系の美人。髪 of 長さは肩よりももう少し下。髪の色は少し赤が入った茶色。

性格は基本のんびり。それなりに大事な事は自分でやるが他は他人任せ。

気は長い方だが、たまに過ぐにキレたりすることも。

静「何で三人だけ？」

作「（ここは同じ反応）この話にはいっぱいキャラが出すぎて作者の私でもいっぺんに全員紹介するのは無理！」

静「ふーん」

作「という事でキャラ紹介はまた書きます!」ので、それまで待って  
ください!!では」

静・作「さよーならー」

作「(何か静香との絡みが少ないよーーー)」

## キャラ紹介（後書き）

静香が帰ってから・・・

作「はぁ・・・静香との絡みが少なかったなー」

海「ドンマイ」

作「・・・んん！？いつの間に！？」

海「いや、さっきからいたんだけどな。呼んでんのに無視されたし」

作「あ、海もここでは素なのね」

海「まあそうだな。ではまた次回」

作「勝手に終わらされたー！！！！」

## 12 (前書き)

久しぶりに海登場!!!

私は隆之と屋上に向かうとフェンス前に腰を下ろした。私には聞きたい事が山ほどあるので遠慮無しで聞いていく。

「隆之はどういう訳でこの高校に来たわけ？」

「手っ取り早く言うtoブレーキだな。暴走の」

ああ。なるほど。そういう事か。

「ゴメン。また私のせいカ」

「何で俺が謝られるんだよ。別に俺は好きで静香のブレーキになってんだ。普段はお前の友達で居れる訳だし」

「・・・そ。多分久美子さんの事だから私と同じクラスにするつもりだと思うけど。多分、それは無理だと思うよ」

「そうカ。別に同じクラスじゃなくても大丈夫だと思うぞ」

隆之とは小学校の時からの付き合いで、唯一私の暴走を見ても離れていかなかった人だ。そんな隆之の存在は私にとって大事な支えであり、希望でもあった。そして隆之の存在は私の暴走を止めてくれる存在でもある。その証拠に私が初めて暴走した時、止めたのは隆之だった。隆之とは中学は違うけどよくあったりもしていた。隆之が自分の志望する中学に入れたのは久美子さんのおかげだ。久美子さんが私が暴走しない様にくれたから、それを止めてくれる隆之も私の側に居なくて済んだ。でも今回私が暴走した事によって隆之はこの高校に入らなきゃいけなくなった。それでも隆之は私の事を友達と言ってくれる。それが私は嬉しかった。

「それより静香。お前、いつまで猫かぶってる気だ？いつかはばれ

るぞ」

「・・・ばれてもいい。でもばれるまで、私は猫かぶってる」

「そうか。話を変えるがああ、クールそうな人とヤンキーっぽい人は誰だ？」

「多分、クールっぽい人はうちの学校の生徒会会長、加藤康祐先輩でヤンキーっぽい人って二人居るんだけど」

「どっちも」

「私と一緒に入ってきた人が帝光学園会長、烏丸悠斗さん。加藤先輩の隣に立っていた人がうちの生徒会会計の近藤圭吾君」

「ふーん」

隆之は意味ありげな返事をして黙った。私には隆之が何を思ってるか謎だけど。それから私達は自分達の家に戻った。

――次の日――

私は目を見開いた。うん。そのまんまの意味で。私が教室に入ると何故かそこには人だかりが。しかも私はその中心にいた人物に見覚えあるし昨日話したし。私が驚きで立ち尽くしているとその中心にいる人物は私に気付いたみたいで声をかけてきた。

「あ、静香！助けてくれー」

「隆之？あ、あれ？何で？違うクラスな筈なんじゃ？あれ？」

どうしよう。私の後ろからもの凄い殺気みたいな感じの視線を感じます！振り向いたらやばい事になりそう。でも・・・好奇心には勝てないもの。私は後ろを振り返ってしまった。そこには何故か黒いオーラみたいなのを纏う天王寺。そして顔には目が笑ってない笑顔が張り付いている。おお・・・これは逃げたほうが良さそうだぞ？私はとっさに逃げようとしたけど体格が違う天王寺に勝てる筈がな

く。私はそのままズルズルと廊下の隅まで連れて行かれた。

「桃井さん？あの男と知り合いなんですか？しかも名前を呼び合う仲で」

「ちよっ天王寺君？笑顔が怖いです笑顔が！えっですね、隆之は小学校の頃の同級生なだけです！」

何故か分からないけど必死に誤解してるみたいだから言ってみる。だって聞く度に周りのオーラが黒くなっていくんだよ！怖い！しかも笑顔のままだから尚更怖い！そしたら天王寺は意味ありげな返事をして話してくれた。私はダッシュで教室に戻り、自分の席に座った。ちなみに久遠さんからの視線も感じる。暫く机に突っ伏している。

「静香」

私は上から呼ばれて顔を上げる。そこにはいつもの隆之が。

「どうしたの？」

「あれ？俺自己紹介したんだけどスルーされてた？」

あれ？いつの間にか転校生を紹介していた？・・・ま、まあ元々知ってるし大丈夫だね？私は多分引きつつてる顔を分らない様に笑顔で誤魔化し、隆之に聞く。

「そ、それでどうしたの？」

「俺の席、静香の隣」

私の隣は何故か開いてる。だから転校生に丁度いいんだろうねー。天王寺の場合、違う所が開いてたからさ。私は誰も座ってない椅子



を引き

「どうぞ？」

っと言ってみる。すると、何故か隆之に笑われた。隆之のつぼが  
まいち良く分からない。うゝん・・・不思議だ。私は首を傾げつ  
自分の体制を前に戻した。

## 12 (後書き)

海の出番みじかつ！

じ、次回からは結構、海と隆之後は麻衣とか智宏とかがメインかと・

・  
そこらへんでまたキャラ紹介しまーす！

### 13 (前書き)

またまた海と隆之、そして智宏、麻衣の登場です。そして静香混乱・  
・ (笑)

どうしてこんな事になったのだろうか？ただ私はいつも通り、お昼が来たから屋上でご飯を食べようとしたはず。なのに何故、私は今、久遠さんと北原と隆之と天王寺と一緒に屋上でご飯を食べている？しかも、何で私は両端で睨み合ってる2人の間に座っている・・・？

――10分前――

私は午前最後の授業が終わり、お弁当を持って屋上に行こうとする  
と隆之が声をかけて来た。

「静香、弁当？」

「うん。そうだよ」

「俺さ買い弁。一緒にくわねえ？」

そう聞いて来た隆之に私は戸惑う。だって女子からの視線がもの凄  
い怖いんですよ。まるで『抜け駆けは許さない！その誘い断りなさ  
い！』とでも言ってる様に。いや、心の中で思ってるんだろーな・  
・私は厄介事に巻き込まれるのは嫌なのでその誘いを断る事にした。

「いや、いーよ。隆之はまず他の人と交流持てば？」

私がそういうと隆之は不満そうな顔をしながらも渋々頷いていた。  
これで厄介事が消えた！と思った私にまた厄介事が降りかかって来  
た。

「桃井さん。お昼一緒にどうです？」

そんな事を聞いて来た馬鹿がいた。・・・天王寺だよ。来たよ天王寺。私の返事は決まってる。

「ごめんなさい天王寺君。今日は遠慮させて頂きます」

私はそう言って立つ。今日は（・）じゃなくて今日も（・）だけだね！！私はすぐに席を離れて教室を出ようとする和不意に久遠さんに呼ばれた。私が振り向くと久遠さんはニコニコして立っており、私に言った。

「ねえ桃井さん！じゃ、私達とお昼食べない？」

そう言ってきた久遠さん。私には久遠さんの誘いを断る理由がないので頷く。前の2人はもの凄いハッキリした理由があったから断ったけど。久遠さんは別に嫌じゃないし、他からの視線を感じないし、別に良いかと思った。でもそれが大きな厄介事何てその時の私は思いもしなかった。

そして何故その時の私は不思議に思わなかった！久遠さんが私ではなく私達と言ってる事を！！私は久遠さんと一緒に屋上へ移動する。前にも言ったと思うが私の学校は屋上禁止。まあ私は許可を貰っているけども。私が屋上の扉へと手をかけ、ドアノブを回す。そして私は次に広がる光景に固まった。

「静香、早く」

「静香遅いぞ」

「静香！久しぶりだな！」

上から天王寺、隆之、北原の順で座って各自、自分の弁当を前に置いている。そして何で隆之と天王寺は機嫌が悪いのかいいのか良く

分からない表情をしている！北原は勿論、笑顔だ。しかも超爽やか。私はその瞬間、後ろを向き逃げようとするも。

「桃井さん！一緒にご飯食べるんだよね？」

久遠さんに捕まってしまいました。ええ！？久遠さんってそういう人でしたか！私は落ち込みどころにか逃げようとしたけど久遠さんの笑顔を見ると怖くて逃げ出せませんでした。そして冒頭に戻る・・・

### 13 (後書き)

麻衣は確信犯です。分かかって静香を誘いました(笑)

そんな麻衣に静香、大混乱です

回想をしていた私は意識を現実に戻してまたため息。何で私がこの睨み合ってる人達の間に入らないといけない。私は北原と久遠さんの間に座ればよかったんじゃないか？何でよりによってこの2人の間に座らないといけない。私には美味しい筈の昼ご飯が今日に限って不味く感じた。

「静香！あの怖い会長って知り合いか？」

「・・・烏丸会長の事？知り合いだけど」

「へえー」

「というか、北原と久遠さん助けて。ここ嫌だ」

私が素直な気持ちを言うのと久遠さんはニコツと笑い北原は苦笑いをした。・・・久遠さん？何故そこでニコツと笑うのですか？訳がわかりませんが。そこは普通、じゃ私が変わってあげるよーっとか言う所なのでは！？違うの！？ただ私が思ってるだけ！？

「ね、私もう食べ終わったし教室帰っていい？」

「ダメだよ桃井さん。皆で帰らなきゃ」

私が質問すると直ぐに久遠さんに叩き落とされました。・・・久遠さんってこんなキャラだったけ？もうちょっとこう、可愛くて元気だった筈・・・こんな性格でした？私は諦めその場でジツとしている事にした。勿論、何を言われ様が得意の無表情で無視し続けた。それから何故か10分は教室に帰れず、教室に帰った私はぐったりとし、机につっぱした。その行動を奇妙なものを見る目でみられ様と精神的にダメージを食らってる今の私には関係のない事だった。私が復活したのは次の授業の先生が入ってくると同時。それから私は



無事、授業を終える事が出来た。その後の私は部活には入っていないので図書室へ直行。昨日読みかけていた本を取り出して読み始める。おー落ち着く。やっぱり何かにのめり込むのっていいよね。集中できるし。私はそれからクラブが終わるまでずーっと本を読んでいた。

「桃井さん」

そう呼ばれて顔を上げると、そこには体操着姿の久遠さんがいた。ああそうだった。久遠さんはクラブ入ってたっけ。

「何？」

「今日一緒に「ゴメン」」

「帰りは私無理。ゴメン。皆と帰って。じゃあね」

私はそう言って立つと図書室を出る。特に何かがある訳じゃないけど私は帰りは一人の方がすきなのだ。ゆっくり、自分のペースで帰りたいから。私は暫く学校の中をウロウロして門を出た。今日は特に用事も無いのでそこらへんをウロウロする。私は書店にはいつて読みたい本を探す。暫くウロウロしていると前から読みたいと思っていた本を発見。

「でもこれ入荷してたっけ・・・？」

「あ、それさっき店頭に並べたばかりですよ」

私はその声にビックリした。いや、普通するからね。いきなり後ろから声掛けられたら。私が振り向くとそこには私と同一年位の青年が立っていた。・・・あ、この人いつも本買う時にレジにいる人だ。

「どうも」

「これ探してたでしょ？」

「はい。でもこれ直ぐ売れるから・・・」

「そうなんすよ。これ人気ですよねー！俺には分かんないけど。とりあえず買います？」

「はい。あ、でももうちょつと見てから買います。あの、ありがとうございます。うございました」

青年はいえいえーっと笑顔で言ってレジへと向かった。よかったー！ここらへんに書店ってここしかないからこれを買う機会が無かったんだよね。よかった。私はそれから色々な本を見てレジへ向かうとさっきの人が色々面白い本を紹介してくれた。何でもお父さんが作家さんで良く本を読まされるとか。聞いてないけど自分で喋ってた。それから私はもう一度お礼を言って書店を出た。その後はカフェ行っって本読んで家に帰った。

## 15 (前書き)

今回、結構少なめです

私は今、職員室にいる。何でも、この前の全国テストの結果がよかったとか。私自身にはどうでもいい話だけどさ。だって勉強はただの暇つぶし。だから結果がどうか、私には関係ない。

「って事だ。次も頑張れよ」

「はい。失礼しました」

私は頭を下げて、職員室を出る。私が今もっているのは、全国テストの結果が書いてある紙。私の兄からすれば、私は大学レベルの頭を持ってるらしい。・・・兄がただ単に頭が悪いだけなんだけども。だって兄って高校3年の問題も解けるか分かんない。とにかくアホなのだ。

「にしても、結構な順位なのかこれは」

私は折りたたまれている紙を見て言う。先生が言うにはとにかく凄いらしい。・・・半分以上聞いてなかったからそれくらいだと思うけどさ。後、何か後日また呼び出されそうな空気だった。・・・やだなあーめんどくさい。そんな事を考えながら机に座る。するとクラスメイトであろう人が私に話しかけてきた。

「桃井さん、もしかしてそれ全国テストの結果？」

「うん。まだ中は見えてないけど」

「そうなんだ！そういえば、廊下にこの前のテストの結果が張り出されてたよ？」

「本当？ありがとう教えてくれて」

私はニコリと笑い、廊下に出る。私の学校はテストの結果が張り出される。だから自分の順位が見れるのだ。さて、今回はあんまり自信がないんだよねー苦手な教科だし？

「・・・あ。今回は良かった」

私の結果は1位。その下には何問正解したか書いてある。えーっと・・・2問間違い。ま、苦手な教科だから当たり前だよ。それにしても思ってたより良い点だった。凄いね私。

「相変わらず頭良いな。静香は」

突然声がして後ろを振り向くとそこにはさっきまでいなかった隆之が立っていた。いきなり声掛けられたらビビるんだけど。

「そういう隆之も高校行ってなかったにしては良い順位じゃん」

「俺か？ そうだな・・・まあまあか。中学の時はもうチョイ良い順位だったんだけどな」

「そりゃ、中学と高校は違うしね。当たり前」

「そうだよなーあ、そろそろ授業始まるぞ」

「ホントだ」

私は急いで教室に戻る。えーっと次は・・・何だっけ？ あ、数学か。予習・・・やって来たっけな？ 私はそんな事を思いながら先生が来るのを待っているのだった。それから時間は過ぎ、放課後になる。私はいつも通り帰り支度を済ませ、図書室に行き、いつも通り書店へ寄ってファミレスへと入った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4381u/>

---

無の少女

2011年11月13日13時07分発行